

研究課題

# 高等学校「総合的な学習の時間」充実のための 研修ネットワークの構築

副題

学校名	金沢大学附属高等学校
所在地	〒921-8105 石川県金沢市平和町1丁目1-15
学級数	9
児童・生徒数	374名
職員数/会員数	24名
学校長	加納 幹雄
研究代表者	山本 吉次



## 1. はじめに

高等学校における「総合的な学習の時間」（以下、「総合」）は、平成 15 年度実施の学習指導要領に基づいて開始された。金沢大学附属高等学校（以下、本校）では、それに先立ち、平成 4 年度から平成 6 年度まで文部省の「教育研究開発学校」の指定を受け、「新教科『国際・文化科』の導入を考慮した教育課程の検討」について実践研究を行った。本研究は「総合」導入に寄与したものであると考える。本校では、研究指定終了後も「国際・文化科」を継続し、国際理解教育・表現を重視した自由研究・ワークショップ型自主研究・情報教育・生活文化など、様々な内容で実践研究を行い、平成 14 年度以降は「生活と社会」・「沖縄現地学習」を内容として「総合」を実践してきた。

平成 21 年 3 月、学習指導要領が改訂され、「総合」は総則から取り出されて章立てになり、一層の充実が求められた。目標や内容の不明確、成果の検証・評価方法の不十分、教科との関連についての配慮不十分、指導方法の未確立など、改善すべき課題が少なくない状況であったからである。本校は、このような状況の中で、平成 21・22 年度国立教育政策研究所の「教育課程指定校事業」に指定を受け、「新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法の工夫改善に関する研究（総合）」を実践研究している。

## 2. 研究の目的

このような中で、「高等学校『総合的な学習の時間』充実のための研修ネットワーク」の構築を研究主題として、パナ

ソニック教育財団実践研究助成（一般）を受けた。その目的は、(1) 本校の「総合」カリキュラムを充実させることと、(2) コラボノートシステムを用いて研修ネットワークを構築することである。

(1) は、「総合」のうち、単元「生活と社会」の学習活動を ICT を用いて充実させることを主眼とした。それにより、生徒の論理性、創造性、問題解決能力、協同性、表現力を育成する。

しかしながら、全国の高等学校「総合」の充実のためには、一校単位の実践研究では必ずしも十分な成果を上げられない。高等学校「総合」に関して、すでに大きな成果を上げている先進校がある。そこで、本校が取りまとめ役となって、「コラボノートシステム」を用いて「総合」の新研修ネットワークを構築する。それにより、これら先進校の取り組み（カリキュラム開発の手順など）を共有・整理・類型化して全国の高等学校に発信する。

## 3. 研究の方法

### (1) 本校の「総合」カリキュラムの充実

本校の「総合」は、1 年生 1・2 学期の「生活と社会」2 単位（1 学期 2 時間連続、2 学期 3 時間連続）と、1 年生 3 学期から 2 年生 1 学期の「台湾現地学習」1 単位で構成されている。このうち「生活と社会」は、1 学期、身近な問題について KJ 法を用いたブレインストーミング及びディベートによって学習する。2 学期は、未来と社会を題材とするプランニング対決によって学習する。「台湾現地学習」は事前学習、現地学習、事後学習よりなる。全体のカリキュラムの方

法、内容、メソッド、目標は、表1に示した通りである。本研究では、このうちとくにプランニング対決についてICTを用いて学習活動の充実を図る実践を行う。

## (2) コラボノートシステムを用いた研修ネットワークの構築

本校が管理者となり、高等学校「総合」の先進校である、群馬県立尾瀬高校、埼玉県立不動岡高校、名古屋大学附属高等学校、福岡県立城南高校、熊本県立鹿本高校の各校「総合」担当者をユーザーとして、コラボノートASPサービスを用いて研修ネットワークを構築し、各校の取り組み（カリキュラム開発の手順など）を共有・整理する。

本校を会場にして、本校を含め上記5校で「高等学校『総合的な学習の時間』先進校シンポジウム」を開催し、各校の取り組み（カリキュラム開発の手順など）と課題を共有する。

この二つの取り組みを取りまとめて、「総合」の目標、内容、方法を類型化する。

図表1 本校の「総合的な学習の時間」のカリキュラム

	方法	内容	メソッド	目標
生活と社会	プレスト ディベート	身近な問題	ポスター、 口頭	根拠をもって主張
	プランニング 対決	未来と社会	プレゼンテ ーション	根拠をもって主張 創造
台湾現地学習	事前研究	異文化	レポート、 口頭発表	認識・仮説
	現地学習	異文化	体験・聞き 取り	認識の拡大
	事後研究	異文化と自 己	プレゼンテ ーション、 レポート	認識の内化

## 4. 研究の内容

### (1) ICTを用いた「生活と社会」プランニング対決の充実

#### ①プランニング対決の概要

プランニング対決とは、「未来を創造するテーマに対して、2グループがプランを提案し、コンペティション（競い合い）をする」学習活動である。1グループ3人から5人で編成。本年度はテーマをi)提案型、ii)生活改善プラン、iii)創作型プランのうちから選ぶことにした。コンペティションの方法は表2に示した。審査はコンペティショングルー

図表2 コンペティションの方法

- ・Aグループのプレゼン（20分）
- ・Bグループのプレゼン（20分）
- ・Aグループへの質疑応答（10分）
- ・Bグループへの質疑応答（10分）
- ・審査（10分）
- ・プランに対する意見レポート作成（20分）

プ以外の生徒が行う。本年度のテーマの事例は図表3に示した。また、評価の観点はi)内容の深さ・広さ、ii)論理性・説得力、iii)表現力・わかりやすさ、iv)チームワーク、である。これらの評価を高めるために、具体的に以下のような取り組みを行った。

図表3 平成22年度テーマ事例

- ・理想の男子高校生をプロデュースする
- ・売れるJ-POPを創るーオリコンチャート1位を取ろうー
- ・完全犯罪を防ぐ方法
- ・理想の新首都
- ・展開の読めないアニメを作る
- ・能登をプロデュース
- ・日本一売れるスナック菓子を作る
- ・万博の日本館をプロデュース

#### ②具体的な取り組み

i) プレゼンテーションは必ずプレゼンテーションソフトを用いさせる。

ii) プレゼンテーション技能を高めるために、教科「情報」で、ワード・エクセル・パワーポイントの技能を習得させる。「情報」におけるパワーポイント技能習得の授業内容は図表4に示した。

図表4 「情報」における技能学習

- ・パワーポイントプレゼン用ファイルの作成
- ・画像処理ソフトの操作方法の習得
- ・「SofTalk」を使った音声録音方法の習得
- ・音楽編集ソフト「サクラ」の操作方法の習得
- ・マルチメディア絵本の作成
- ・文字・画像デジタル化の方法の習得
- ・表計算ソフトの活用

iii) 評価の観点として「表現力」を入れる。また、プレゼンテーションソフトのスライドの展開において論理性を評価する。

iv) 1学期のブレーンストーミングの発表においても、ポスターを用いさせ、表現力の重視を意識させる。

### (2) コラボノートシステムを用いた研修ネットワークの構築

#### ①コラボノートシステムを用いた研修ネットワークの構築

4月当初、コラボノートシステムを用いて本校を管理者とし、先進校5校をユーザーとする研修ネットワークを構築した。しかし、次の点により、これを十分に活用できなかった。最大の理由は、各ユーザーが、常時、コラボノートを開かないために、事実上、情報交換やコンテンツ共有ができないことであった。次に、ユーザー全員がコラボノートの利用初心者であったため、このシステムを使いこなすことができなかった。むしろ、情報交換やコンテンツ共有は、電子メールおよび電子メール添付の方が容易であったからである。

## ②「高等学校『総合的な学習の時間』先進校シンポジウム」開催

「高等学校『総合的な学習の時間』先進校シンポジウム」は、平成 22 年 7 月 31 日、本校を会場として開催した。参加者は、北陸三県を中心に、高校教員、大学教員、学生、出版社など 65 名であった。日程は、第一部では各校の取り組み、第二部では各校の課題が報告され、関西大学総合情報学部黒上晴夫教授から総括をいただいた。



「総合的な学習の時間」先進校シンポジウム

## 5. 研究の成果と今後の課題

### (1) ICTを用いた「生活と社会」プランニング対決の充実

この取り組みにおいては、論理性、創造性、問題解決能力、協同性、表現力の育成に大きな成果を得た。とくに、表現力においては、単に文字と写真だけのプレゼンテーションではなく、アニメーションを駆使し、音楽コンテンツや動画コンテンツとリンクを張るグループも少なくなかった。生徒による自己評価では、「今後このような取り組みに頑張りたいか」という項目に 97%が肯定的であった。



プランニング対決コンペティション

その理由は、第一にコンペティションという形式が、生徒に「健全な競争心」を生み出したことである。相手に負けたくないという気持ちが、深く広い調査や表現における様々な創意工夫を生み出した。第二に教科「情報」で習得された技能が「総合」で活用されたということである。第三に、明確な評価項目による教員評価、生徒相互評価が、到達目標を明確にしたことである。

プランニング対決で学年最優秀賞を獲得したグループのプランを紹介したい。テーマは「売れる J-POP を創る」である。まず、2005 年～2009 年のオリコンチャート上位 15 曲計 75 曲の歌詞、コード、調、楽器構成、ジャケットを調査・分析。その時、純粋な楽曲の優秀性を検討するため、対象としてアイドル曲排除というデータ批判した。これらの結果をグラフ化し、専門知識をわかりやすく解説した上で、データを踏まえて自ら作詞・作曲し、パワーポイントにリンクさせて楽曲を披露した。ジャケットも創作。事例の博搜、論理性、説得力、創造性、遊び心、何れを取っても秀逸なプランであった。

### (2) 「総合」の類型と本校の「総合」

今回の研究では、次の点が明らかになったことである。ま

ず、先進校の取り組みが共通点を持っていることである。何れも課題解決型であること、知の技法を学んでいること、表現力やコミュニケーション能力を重視していること、生き方・在り方につながるものであることである。したがって、図表 5 の類型はあくまで取組の主要な面を示したものにすぎない。次に高等学校「総合」の意味について共通理解を得た。それは「学ぶことの意味がわかること」（黒上教授）であるということである。つまり「高大連携のキー・コンピテンシー」を育てるということである。三つ目として、教師の役割は「教え込み」ではなく「共学び」であり、その心構えこそ、「総合」が成果を生む重要なファクタであるということである。

図表 5 先進校 6 校の類型と特徴

高 校	学習活動名	類 型	特 徴
群馬県立尾瀬高校	地域活性化プロジェクト	地域型	地域探検・地域へ発信
埼玉県立不動岡高校	F プラン	キャリア教育型	進路学習・課題学習・小論文学習
名古屋大学附属高校	総合人間科	探究型	生命と環境・国際理解と平和・生き方を探る
福岡県立城南高校	ドリカムプラン	キャリア教育型	自立・自覚・貢献
熊本県立鹿本高校	Q タイム	探究型・キャリア教育型	課題解決・方法知
金沢大学附属高校	生活と社会台湾現地学習	知の技法型 宿泊を伴う総合	課題解決・方法知

しかし、もっとも重要なことは、課題が明確になったことである。課題として挙げたことは次のようなことであった。①運営体制、②理念やノウハウの継承の問題とマンネリ化の問題、③支援と評価の方法、④教員の指導力と負担感、⑤他教科や LHR など学校における諸活動との関係である。これらを克服するのに示唆的なのが、鹿本高校の取り組みである。それは、「総合」に関する教員研修会の充実である。時間割の中に研修会を行うとともに、毎年、カリキュラム (P) - 授業実践 (D) - 評価 (C) - 改善 (A) を行っており、これによって②～⑤の課題に対応している。

## 6. おわりに

(1) ICT を用いた「生活と社会」プランニング対決の充実の取り組みにおいては、生徒の論理性、創造性、問題解決能力、協同性、表現力の育成に大きな成果を得た。(2) コラボノートシステムを用いた研修ネットワークの構築は、システムを活用することができなかったが、シンポジウムを通して、高等学校「総合」の意味と課題を明らかにし、その克服方法を模索することができた。本研究を通して、生徒の「人格」としての成長のために「総合」がいかに重要かを改めて痛感した。本年 6 月には、本実践研究を含め、2 年間の本校の「総合」の取り組みを報告書にまとめるとともに、10 月の全国国立大学附属学校連盟高校部会研究会で発表する予定である。